

史資料からみる

～学習院～



国劇部と吉村昭

2017(平成29)年は、学習院が神田錦町に開業して140年、1947(昭和22)年に私立学校として再出発してから70年という節目にあたります。1947年は学生の課外活動にとっても画期となり、学習院輔仁会に新たな部や同好会が次々と誕生しました。そのひとつが同年6月設立の国劇研究会(48年国劇部)です。昨年学習院アーカイブズに、創設メンバーだった小山昭元(観翁・1929~2015)氏所蔵の国劇部資料が寄贈されました。その中に収められている「国劇研究会会員名簿 第一号」には、「会員番号15 吉村昭(文一)」の名が記されています。

作家吉村昭(1927~2006)は1947年に旧制学習院高等科に入学後、肺結核のため就学困難となって胸郭成形手術を受け、長期にわたる療養生活を強いられました。その間学制改革で旧制高等科は1950(昭和25)年3月に廃止され、吉村は新制学習院大学を再び受験し、同年4月文政学部政治学科一年に入学しました。病の癒えた吉村は文芸部に入つて創作を始め、学習院大学短期大学部(現学習院女子大学)から文芸部に参加した津村節子と出会ったことは、吉村や津村の著作でも紹介されています。

吉村は国劇部にも再び顔を出し、1951(昭和26)年撮影と思われる写真に吉村(後列左から2番目)の姿があります。また同年発行の国劇部四周年記念パンフレットに、吉村は

「尻切れトンボ」と題して次のように寄稿し、芝居好き的一面とともに後年の活躍を予感させる観察眼をみせています。

たしか、昭和十九年だつたかと思う。何でも、総合防空演習とか云うのがあつた日のことで、途中二度ばかり待避させられて……全く芝居見物も樂じやありませんでした。(略)何しろ、羽左衛門を初めて觀ようと云うんで、力んで舞台をにらんでいました。愈々役者の出になつて、花道を一人の役者が揚幕をはねて舞台の方へ進みます。「橋屋ツ」は、あれ、これが音に聞えし……そう思いまして、神経を集中致しましたが、私は(あゝ、これやあ、彫刻だ)と思いました。それ程羽左の後姿は、芸術的な彫刻が歩いているとしか思えない程、立派なものでした。私もそれ以後、色々な役者を見て来ましたが、羽左衛門に感じた彫刻的な美しさと云うものをあれ程強く感じたことはありません。

国劇部資料を整理していると、課外活動をめいっぱい楽しもうとする学生たちのバイタリティーを強く感じます。代々の学生の熱い思いの蓄積が、自然とキャンパスの雰囲気を形成していくのではないかでしょうか。学生の活躍を示す資料を保存し後代に伝えていくことは、学習院アーカイブズの大切な使命だと考えております(桑尾光太郎 学習院アーカイブズ職員)。